

鹿児島県立短期大学 人文学会論集 「人文」 第三十七号（二〇一三年八月三十一日発行）
抜刷

〈山村暮鳥〉の戦後
—— 国語科教育／日本近代詩史における位置 ——

竹本寛秋

〈山村暮鳥〉の戦後

―国語科教育／日本近代詩史における位置―

竹本 寛秋

一 序

山村暮鳥に「日本」という詩がある。「日本、うつくしい国だ」で始まり、「小さな国だ／小さいけれど／その強さは／鋼鉄のやうな精神である」といった詩句を含むこの詩は、昭和十年代末までに刊行された複数の国語・修身教科書に教材として採られ、人口に膾炙したと思われる。一方、ある意味当然ではあるが、昭和二十年の終戦後にこの詩への言及がなされることは稀である。全集類^①を除いて「日本」を収録している戦後出版物は昭和四十四年刊行の『日本の詩歌 第十五卷』^②のみであり、鑑賞を担当している山室静も「日本を歌ってこれほど美しい詩は、ほかに見当たらないのではないか」といいつつ「何か軍国日本の名残りが感じられるのは否めない」として「今はこれを載せている読本はあるまいと思う」と述べている。もちろん、山村暮鳥が没したのは大正十三年であり、対米宣戦布告はおろか、満州事変や支那事変よりも前の話である。山村暮鳥の詩は〈戦争

詩^③〉ではありえないし、暮鳥その人自身の問題として戦争責任が問われたことはない。問題となるとすれば、山村暮鳥のテクストが時局の推移に対してどのような文脈において利用されたかだけである。

ただし、本稿の狙いは愛国的教材として詩「日本」を取り出して戦争の文脈において批判することにはない。また、詩「日本」を、そうした愛国的教材から引きはがして評価することにもない。本稿の狙いは詩「日本」を検討することによって、昭和二十年を境界線としたとき、その前後で行われる〈山村暮鳥〉評価の構造的な動きを検討することである。

最初に大枠を示しておくならば、山村暮鳥の詩は戦前、「国土愛・国家愛等を喚起し、覚醒させ^④」るとともに、「大自然の恩恵と黎明勤労の農夫達の苦難」に対する「感謝の情^⑤」を起こさせる格好の教材として利用された。一方、戦後において、詩「日本」は消去される。しかし同時に地方の学校教員を中心として、地元の詩人としての山村暮鳥顕彰が活発化する。その運動の原動力は、無名の声として国民に浸透するものでしかなかった山村暮鳥の詩を「郷里」の詩人の詩として取り戻す使命感である^⑥。こうした動きにおいては、詩「日本」自体は表舞台から消去されつつ、〈山村暮鳥〉の固有名は回復される。なおかつそれは〈群馬〉や〈茨城〉といった具体的な土地に結びつけられる。だが、ここでの暮鳥顕彰は「郷里」「郷土」を媒介とした「文化国家」日本再建という意味で戦前の暮鳥利用と同一の論理上

にある。

一方で、草野心平、藤原定、伊藤新吉といった人々によって（日本近代詩史）における山村暮鳥の普遍的価値を見いだす動きが現れる。この動きは暮鳥の詩を簡単に縦覧できる選集の刊行を活発化させる。それらの成果はその後の那珂太郎、大岡信、北川透などによって行われる、明治詩と大正詩の質的切断線を山村暮鳥の詩集『聖三稜玻璃』に見いだし、なおかつ、内容が充填されない言語実験として『聖三稜玻璃』を位置づけて萩原朔太郎を卓越化する歴史観につながっていく。

〈郷土詩人〉として教育・行政一体となつて進む〈地方文化〉の文脈での山村暮鳥顕彰の流れと、〈近代詩〉が〈現代詩〉に変容する起点として山村暮鳥を〈日本近代詩史〉に位置づける二つの流れが同時に行われたのが〈山村暮鳥〉の戦後であると言える。〈地方〉における固有名の回復と、〈詩史〉における普遍性の獲得、この二つの動きを跡づけていくこと、これが本稿の狙いである。

二 「日本」をめぐって

詩「日本」の初出は大正九年十二月発行の『文章世界』であり、その後大正十三年九月『少年倶楽部』に「日本にあたふ」と改題して再掲された。生前の詩集に収録されることはなかったが、

暮鳥没後の昭和十五年に刊行された百田宗治編の山村暮鳥詩集『萬物節』⁸⁾に収録された。

長い引用になつてしまいが、「日本」全編を引用する。

日本

日本、うつくしい国だ

葦の葉つばの

朝露がぼたりとおちてこぼれてひとしく

それが

此の国となつたのだとも言ひたいやうな日本

大海のうへに浮いてゐる

かあいらしい日本

うつくしい日本

小さな国だ

小さいけれど

その強さは

鋼鉄のやうな精神である

おう日本

ぴちぴちしてゐる魚のやうな国

勇敢な日本

古い日本

その霧深い中にとちこもつて

山鳥の尾のながながしいゆめをみてゐたのも
いまはもうむかしのことだ
めをあげて

そこに

どんな世界をお前はみたか
日本、日本

お前のことをおもふと
此の胸が一ぱいになる

お前は希望にかぐやいてゐる

お前は力にみちみちてゐる

そして真剣だ

だが日本よ

お前の道はこれまでのやうに

もうあんな平坦なものではあるまい

お前はよるひる絶えず

お前のまはりに打寄せてゐる

その波の音をなるときいてゐるか

寂しくないか

おう孤独な

遠い一つの星のやうな日本

からりとはれた黎明の天空のやうな国

ときどきは通り雲のさつとかかるぐらゐのことはあつても

おまへはまだたゞのいちどでも

その顔面に泥をぬられたことがないんだ
そんな美しい国なんだ

日本

幸福な日本

強い日本

わたしらは此処で生れたんだ

また此処で最後の息もひきとつて

遠祖らと一しよになるんだ

墳墓の地だ

静かな国、日本

小さな国、日本

つよくあれ

すこやかであれ

奢るな

日本よ、真実であれ

馬鹿にされるな

「日本」をはじめとした山村暮鳥の詩は昭和初期から、中等
教育学校の国語あるいは修身の教科書に収録される。教科書に
採録される詩は「日本」のほか、「此の世のはじめもこんなで
あつたか」「人間に与へる」など、山村暮鳥が人道主義に移行
したと言われている大正七年の詩集『風は草木にささやいた』⁹⁾
時代の詩に集中している。¹⁰⁾

昭和十年に岩波書店が刊行した教科書『国語』の学習指導書である『国語 学習指導の研究 第二』¹¹⁾が詩「日本」について「文学を通じて、情意に訴へてゆり起す国民性・民族性の自覚の深い意義があり、文学の国民教育に於ける価値が存立する」と解説するように、この詩が、読者に「日本」の歴史と将来について情意的に働きかける効果を持つてゐることは間違いないだろう。

この詩に、日本の開闢から鎖国、開国といった歴史を踏まえた上で世界に飛躍する日本の将来を激励するメッセージを読むことは容易である。『国語 学習指導の研究 第二』においても、「葦の葉つばの／朝露がぼたりとおちてこぼれてひとしづく」には「古事記の開闢説を思はせる」との解説が付され、「その霧深い中にとどこもつて」は「鎖国」状態を示すと解説される。こうした流れから、「お前の道はこれまでのやうに／もうあんな平坦なものではあるまい」に日本の将来に降りかかるであろう困難を読むことはたやすい。「日本よ、真実であれ／馬鹿にされるな」について指導書は「驕りは破滅の本だ。真実であれ、併し他国に馬鹿にされるな」「傍線は引用者による」とわざわざ「他国」をつけ足す。これにより、この詩句は外国に対する日本の姿勢を叱咤し激励する言葉として読むべきものとなる。また、「おまへはまだたゞのいちどでも／その顔面に泥をぬられたことがないんだ」は日本の純粋性を歌う詩句として受容されることになるだろう。¹²⁾

昭和十四年『国語科教授の実際 帝国実業読本提要 巻

二』¹³⁾では「孤独な」という語句の解説として、「昭和八年国際連盟脱退の当時」という具体的な事例をあげた上で、日独伊防共協定が締結された後においても「これに頼ることなく、愈々国力を充実し、国運の発展を期せなければならない」とまで具体的事例に引きつけた解説がなされている。

暮鳥の詩「日本」を高村光太郎の「地理の書」¹⁴⁾と対置してみれば、世界における地勢学な位置から日本の位置と覚悟を託した「地理の書」に対し、「日本」は時間軸の観点から日本の歴史への自覚と将来に向けての覚悟を認識させるものとして機能すると言える。

この詩を最も特徴付けるのは、語り手の「日本」への呼びかけであろう。この詩の語り手は、「日本」の歴史を俯瞰できる位置に立ち、「日本」の歴史や性質を超越的な立場から記述できる位置にいる。その上で、「つよくあれ／すこやかであれ／奢るな／日本よ、真実であれ／馬鹿にされるな」と呼びかけるのである。日本を思うことで「此の胸が一ぱいになる」存在が一体誰なのか、記述はされない。一方で、「わたしらは此処で生れたんだ／また此処で最後の息もひきとつて／遠祖らとしよになるんだ」との記述により、呼びかけの主体も「日本」に所属する存在であり、「日本」に生まれ、「日本」で死ぬ存在との属性も与えられている。

こうした表現により、読み手は「日本」を超越する視点から日本の歴史と将来を俯瞰し呼びかける存在と、国民として「日

本」に所属し、まさに呼びかけの対象となつてゐる「日本」の将来に責任を持つ存在として二重化された位置に立たせられる。呼びかける者であり、呼びかけられる者である、そうした二重化により、「奢るな」「真実であれ」「馬鹿にされるな」は、国家としての日本への呼びかけでありながら、国家に所属するものとしての個人を律する規範としての効力を発揮することになる。そうした意味で詩「日本」は、国家規範と個人規範の両者に働きかけ効果的に国民の内面へアプローチする仕掛けを搭載していると言える。

岩波書店編集による教科書『国語』においては異同があり、「また此処で最後の息もひきとつて」以下が次のように改作されている。

わたしらのうまれたところ

めざめた国、日本

若い国、日本

すこやかであれ

奢るな

日本よ、真実であれ

馬鹿にされるな

この改作が誰によるものかは定かではないが、『国語 学習指導の研究 第二』はこの部分を歴史的日本から将来の日本へ

の展開として積極的に読みにつなげ、「伝統からいへば「古い日本」である。併し将来を望めば、「若い国、日本」に違ひない」と述べて、「歴史は古いが、更に未来性の豊かな国」であることを示し、全体を通して「日本の将来を、理想を、歌ふことに展開してゐる」と記述する。この異同は、日本に所属する個人としての国民の〈生／死〉における〈死〉を削除し、個人的な観点よりもむしろ国家的な観点からの「日本」の将来を強調する結果を招いていると言えよう。

ここで、人間が生まれ／死に、連綿と続く〈世代交代〉という主題から、他の暮鳥の詩を見ていきたい。暮鳥における〈世代交代〉の主題は、国家の永続性と簡単に結びつく形で展開されているものがある一方で、〈世代交代〉における〈生殖〉の主題、および〈世代交代〉における〈超越者〉の位置をめぐる、より複数の読みを可能にするものとして展開している。

暮鳥において、〈世代交代〉という主題は、『風は草木にささやいた』以降の詩に頻出する。『風は草木にささやいた』の巻末詩である「後より来る者におくる」¹⁶は、「こども等よ／いまは頭も白髪となり／骨が皮をかぶつたやうな体躯を／漸く杖でささへて／消えかかった火のやうに生きてゐるお前達のお爺さんを見な」との呼びかけではじまり、祖父、父と続く系譜を「あれでも昔は若くつて大胆で／君等のお父さん達が／いま鋏鎌を振りまはして田圃や畑でたたかつてゐるやうに／弓矢銃丸の間

をぐぐりむづつて／いさましいはたらきをしたもんだ」と描き出す。その上で、その系譜に連なる者としての子どもへ「子ども等よ／鉄のやうに頑丈であれ／やがて君達のお父さんとお爺さんのやうになる時／其時、君等はお父さんのやうな大人になるのだ／此の時代と世界とを／そして立派にうけ継ぐのだ／その君達のことを思へば／此の胸はうれしさで一ぱいになるぞ」と呼びかけ、祖父、父、子と受け継がれ続けるであろう人間の系譜への感慨として「胸」は「一ぱい」になる。詩「日本」における「お前のことをおもふと／此の胸が一ぱいになる」が一体何に対しての感慨なのかは、「日本」だけを読んでもわからないが、「後より来る者におくる」を横に置いて読むならば、国家としての「日本」の継続性に対して「胸が一ぱいになる」と読むことが可能になる。だとすれば、詩「日本」は戦前の教科書が意図する通りの「国民性・民族性」の自覚に寄与する詩と読むことができる。『風は草木にささやいた』の巻頭に「この書を祖国のひとびとにおくる」という言葉がおかれていることを考え合わせるならば、巻末の「後より来るものにおくる」は巻頭の「祖国」と呼応し、『風は草木にささやいた』一冊全体が愛国的なパッケージとしてあらかじめ仕組まれているとも言える。

ただ一方で、世代交代の主題は露骨に〈生殖〉を連想させる形で展開されることがある。詩「父上のおん手の詩」^⑦では、「父の手」は「馬鋤」「地べたの中からでも掘りだした木の根つこ

のやうな」と喩えられ「手」と「土」との関係性が示唆された後、「唯その父の手をおもふと自分の胸は一ぱいになる／その手をみると自分はなみだで洗ひたくなる／然しその手は自分を力強くする／この手が母を抱擁めたのだ／そこから自分ではできたのだ」と、父母の性愛の結果としての自己の存在が示唆される。さらに別の詩「としよつた農夫は斯う言つた」^⑧では「穀倉のうしろの暗い物蔭で／俺等はたのしい逢引をしたもんだ／そこで汝あみごもつたんだ／何をかくすべえ／穀倉がどんな事でも知つてらあ」と、よりあからさまな形で示される。その上で「そこの尻つ子がふりけえつてみるほどうい若衆になつた／おいらはそれを思ふとうれしくてなんねえ／しつかりやつてくれよ」と父から子どもへの呼びかけとして世代交代が描かれる。ここでの「おいらはそれを思ふとうれしくてなんねえ」は「此の胸が一ぱいになる」の方言による変奏であることは明らかである。もちろん、〈生殖〉を露骨に想起させる書き方をしていることが「愛国」からの距離に単純につながることではない。〈生殖〉の主題は〈産めよ増やせよ〉の文脈からまったく離れるものではない。

ただし、「としよつた農夫は斯う言つた」においては、〈世代交代〉を俯瞰する「穀倉」が存在することに注目する必要がある。〈生殖〉行為が「暗い物蔭」でなされようと、すべてが「穀倉」によつて見透かされていることを農夫は自覚している。個別の存在を超えて〈世代交代〉の有り様を俯瞰できる位置にい

る存在を〈超越者〉と名付けるならば、ここでの「穀倉」は〈超越者〉として設定できる。

この〈超越者〉という観点から暮鳥の詩を眺めていくならば、詩集『萬物節』において「日本」の直前に掲載されている詩「雄渾なる山嶺」¹⁹を、〈超越者〉の位置それ自体を対象化したテクストとして読むことができる。この詩において、山頂に立つ「自分」は「これが自分であらうか／否／神である」と自身を「神」Ⅱ〈超越者〉の視点に置く。その視点から「ふもとのことをおもへば／そこには／森があり／野があり／畑や田圃があり」と世界を俯瞰していく。そして「また村々があり／都会があり／そこでたくさんひとびとは／よろこんだり／かなしんだり／生れたり／死んだり」と、〈超越者〉の立場から人間の〈世代交代〉を描いていく。そしてこの詩においては、最終的に「自分」は「ここにかうしてゐると自分は神だ／だが自分はふもとをおもふ／此の山をくだらなければならぬ」として、〈超越者〉の視点から自ら降りていくのである。ここでは、〈超越者〉として俯瞰する視点と、俯瞰される個別的な存在としての視点の双方が描かれる。さらにこの詩は下界に戻った上で「おお山よ、すばらしい山よ／いまこそ／お前は自分の中にある」と結ばれるのである。すなわち、下界に戻った個別的な存在としての自分がその状態において「山」を内包する――〈超越者〉を内包した――存在として多重化される構造を持っているのだ。

〈超越者〉という観点から見たとき、最も問題作と言えるテ

クストは「憂鬱な大起重機の詩」²⁰であろう。この詩においては、「大起重機」の視点から人間が「蟻のやうに小さく／大きな重いものの取去られたところに群つて／うようよ蠢動^{うごめく}いてゐる人」と描写されて人間の卑小さが強調されつつ、その大起重機を作った人間の力を「人間は自然を征服した！／今こそ人間は一切の上に立つべきだ」と礼賛しながら、「此の大起重機にその怪力を認めた瞬間から／まったく憐れな奴隷となつた／そして蟻のように小さくなつた」と人間が作り出した機械によって人間を俯瞰し人間に超越する存在が出現し、人間が卑小な存在となつたことが言及された後に、「それがどうした／それがどうした／かんかん日の照る地球の一てんに跪坐^{ひざまづ}いて此の大怪物を礼拝しろ／ああ此の憂鬱な大起重機の壮麗！／ああ此の憂鬱な大起重機の無言！」と結ばれる。ここでの「礼拝しろ」「大起重機の壮麗！」「大起重機の無言！」は素直な大起重機賛美、機械賛美とはとても読めない。ここでは、人間が作り出した機械によって人間が自ら卑小な存在となつたことの皮肉を併せて読まざるを得ないのである。こうしたアイロニカルな視点は「新聞紙の詩」²¹にも現れる。「新聞紙の詩」では、「けふ此頃の新聞紙をみる／此の血みどろの活字をみる／目をみひらいて読め／これが世界の現象^{ありさま}である／これが今では人間の日日の生活となつたのだ」と新聞紙に書いてあること以外は世界ではなく、現在の世界はすべて新聞紙に収められていると表現される。この詩においては、新聞の読み手を、新聞を読むことによって世界

を俯瞰できる〈超越者〉の位置に立たせつつ、その読者もまた新聞紙に描かれた世界に内包された存在でしかないことが提示されていると言える。〈超越者〉は単純に俯瞰する存在として描かれることはなく、相互に俯瞰し俯瞰される立場の中で、人間と世界の関係は多重構造として示されるのである。

こうした観点から詩「日本」を振り返ってみるならば、読者を「日本」に呼びかける存在でもあり、呼びかけられる「日本」に所属した存在でもある位置に立たせるこのテキストの「真実であれ／馬鹿にされるな」といった呼びかけを、（現状真実でないから）「真実であれ」、（現状馬鹿にされているから）「馬鹿にされるな」と読むことさえできてしまう。小林美奈は、雑誌『第三帝国』と山村暮鳥の関係を考察し、山村暮鳥の詩集『風は草木にささやいた』を、普通選挙運動を展開していた『第三帝国』第八十号起訴に対する編集主任・石田友治の筆禍事件への激励という観点から読むという試みをしているが、そうした文脈を考え合わせてみても、詩「日本」における、呼びかける／呼びかけられる関係は単純に「直接国土愛・国家愛等を喚起し、覚醒させ」るものとして回収できるものではない。

詩「日本」はその初出年次から考えるならば、各種教科書によって誘導されるような時局とは無関係である。そして、見てきたように、詩「日本」は超越者からの呼びかけ／自己の位置という観点からみるならば、ストレートに日本への愛国的心情を読むこともできるし、「日本」への屈折した皮肉を読むこと

も可能といえる。しかし、詩「日本」は大正十三年には『少年倶楽部』へと転載され、愛国的教材として教科書に採録され、昭和期日本が直面する文脈における呼びかけとして教材化され、国民の内面への呼びかけとして受容されるべきものとして流通することとなるのである。

三 「口語自由詩」によって涵養される「愛国と憂国」

さて、ここで、戦前の教科書指導書が、暮鳥の「日本」を表現上どのようなものとして解説しているのかを確認してみたい。戦前の教科書における山村暮鳥の詩の解説は比喩の巧みさを指摘するもの、擬人法の効果を指摘するものなどがあるが、注目すべきはこの詩が「口語自由詩」あるいは「散文詩」であることの効果に対する指摘である。まず、「日本」についての最初の解説と思われる昭和三年の指導書の指摘を見てみたい。

この詩を反覆読誦してゐるうちに自ら愛国の情は、ひし／＼と胸を打つのを覚える。これ作者の胸底にたぎりかへる愛国と憂国の至念が、個性の感動の律動そのまゝを自然に表現する口語自由詩の形式を通して、遺憾なく溢れ出ているからである。そこがこの詩の持つ尊い力といふものであらう。

この詩はやゝ雑駁の嫌がないでもないが、それは清新で爽かな譬喩によつて十二分に償はれてゐるといふべきである。²³⁾

詩「日本」は「口語自由詩」という形式をとることによつて、「雑駁」ではあるが「感動の律動そのまゝ」を「自然」に表現できるものとして位置づけられる。

ここにおいて、「口語自由詩」であるから感動をそのまま表現できるということを無前提に受け入れる立場からは距離をとりたい。むしろここで注目すべきなのは、国語教科書において「雑駁」についてエクスキューズがなされつつ「口語自由詩」であることが「感動の律動そのまゝ」を伝える効果的な手法として位置づけられていることそれ自体——「口語自由詩」と内面が直接つながるといふ神話が国語教科書においても通用する論理となつてゐることだ。

岩波書店『国語』の指導書は、「全体的機構の上に主題的なものを表現する方面に対してはむしろ無頓着といふに近い詩と思はれる。そこが散文詩たる所以の一つでもあるが」²⁴⁾と言いつつ、この詩には「一語一句に全体が具現」してゐるのだから、全体の構成的整序を考えるのではなく、一語一語をむしろゆつくり味わう方向で学習させることを勧める。その他、暮鳥詩についての指導書の指摘には「技巧を欠いて洗練されない表現の仕方をしてゐる様であるが、そこに又捨て難い素朴な味のあるところ、敬虔な自然への愛の溢れてゐるところを見逃がしては

ならない」²⁵⁾といった形での、技巧の無さがむしろ自然な感情の流露につながつてゐるとの指摘が多く見られる。これらは湯地孝の「先ず詩に理屈は禁物である。たとひ瞑想的な性質のものであつても論理を組み立ててはいけない」²⁷⁾や、土田杏村の「君はむしろ其の技巧を棄てようと欲して居たのだ。君の詩が人の心を打つのは君の詩の魂が人の心を打つのである」²⁸⁾などの言により理論的に裏打ちされる。その上で「日本」は、「しかつめらしい態度で、日本の神聖さとか崇高さとかを讃へたもの」²⁹⁾とは異なる〈自然〉な日本賛美の詩として位置づけられる。こうした解説を見ていくならば、詩「日本」は、「口語自由詩」の自然性による無技巧がおのずから心に訴えるという手法によつて、後の〈戦争詩〉に見られる「擬古的定型」(瀬尾育生)³⁰⁾「詩語及び表現の非口語化」(今村冬三)³¹⁾よりもはるかに悪辣な浸透力を発揮するものとなりうると言えるのではないか。

四 〈山村暮鳥〉の戦後

さて、ここまで、詩「日本」を中心にして山村暮鳥の詩が戦前どのように位置づけられ利用されてきたかを検討してきた。ここから、戦後これがどのように変化したかを考えていきたい。

室生犀星は昭和二十七年の『山村暮鳥詩集』の「解説」³²⁾にお

いて、自分が今まで繰り返し書いてきた暮鳥詩集への「序」が「お座なり」であつたことを白状する。犀星は、暮鳥の各種選集に四回も序、跋、解説を書いているのだが、昭和二十七年に至つて、自分がこれまで書いてきた暮鳥詩集の「序」は忙しさにまけての「お座なり」の仕事であり「山村にも読者にも済まないこと」であつたと謝罪するのである。

昭和四年刊『現代詩人全集』の「山村暮鳥集」に寄せて「山村の本質を新しくむき立てようと思ふのだ」とまで述べた犀星が、ここに来て読者に自身の「軽率」さを反省する理由は何に求められるだろうか。『現代詩人全集』において「風景 純銀もざいく」を収録しなかつた室生犀星にして、「その作品発表当時ははなはだ変な、わざとらしさがうかがわれたが、今日になると、これらの平仮名の行列があたかも菜の花畑をみるやうで、美しい」と述べるに至るにはそれなりの理由が必要であろう。この犀星の変化は何に由来しているのか。

結論から述べるならば、犀星の変化は戦後における新たな読者層の登場によつて引き起こされたと言える。そして、戦後に現れる山村暮鳥の新しい読者層は、二つの方向性を持っている。一つの大きな流れは、暮鳥生誕地である〈群馬〉、及び暮鳥が没した地である〈茨城〉における主に学校教員を中心とした暮鳥顕彰である。

志村弘之は、戦後昭和二十三年にいち早く暮鳥研究書『山村暮鳥とその作品』^③を出版している。本書は暮鳥が代用教員とし

て教鞭を執つた堤ヶ岡小学校のある群馬県堤ヶ岡の有志団体・堤ヶ岡文化会が主体となつて刊行されたものであり、「序」には室生犀星のほか、群馬県教員組合群馬郡支部長・鈴木貞造が配され、「推奨の言葉」は群馬中央中学校長・藤井熊男が書き、前後を教育関係者が固める構成となつている。また、この著作にも寄稿しており、後に『暮鳥伝』^④を執筆することになる小山茂市は教員として堤ヶ岡尋常高等小学校を含め、群馬や長野で教鞭を執る人物であり、代用教員時代の暮鳥の教え子にあたる。さて、この本が山村暮鳥をどのような文脈で読もうとしていくのかを見てみたい。志村弘之は、茨城県大洗町の暮鳥詩碑を想起して、以下のような感想を抱いている。

私はじつと瞑目して思つた。日本の代表たるべきこの画期的な詩人が、どうして郷里には知られないのだろうかと思議でならなかつた。子供は、青年は、各々がまなぶ教科書の中で、暮鳥の詩を不知不識の間に読み上げていながら、その郷里の偉人を、郷里の誇としては知るよしもないこのめぐりあわせによつて、所功に立たずという皮肉な宿命を持つ不世出の詩人暮鳥の、薄命ささえひそんでいるのではないかと思つた。^⑤

志村は、暮鳥の詩が教科書を通して人々の間に浸透しているにもかかわらず、それが〈山村暮鳥〉という固有名にも、群馬

や茨城といった「郷里」にも結びついていないことを嘆く。第六期国定教科書が慌ただしく刊行され、戦後教科書への転換の準備期間である昭和二十三年に出版されたこの本の出版への情熱を支えているのは、教科書によって国民の内面として浸透しているにもかかわらず、固有名を持った詩人としては認識されていない〈山村暮鳥〉を、固有名を持った「郷里」の代表的詩人として救い出す欲求である。こうした欲求に裏打ちされた志村は『風は草木にささやいた』の巻頭言「この書を祖国の人におくる」をいとも簡単に「祖国とは郷里のことでせう」と読み替える。その上で、戦争によって「総てのものを失」った日本が「新しい文化国家として、再び立ち上らうとゆう輝かしい目標」に向かうためには、草の根からの「文化」浸透が重要だと説き、そのアイコンとして「群馬に育つた、不朽の詩人山村暮鳥」が名指される。

この本の「推奨の言葉」において藤井熊男は、暮鳥の「一日のはじめに於て」³⁷を引用した上で「中学生のみなさん。『おや何処かで読んだな』と気がつくでしよう」とし、「作者、山村暮鳥こそ、利根の清流を距ること西へ五軒、北にゆつたりとした赤城、郷黨相倚る榛嶺の姿を、又西遙かに妙義山を望み、南は展けて関東の大平野に連る美しい郷堤ヶ岡村に呱呱の声をあげ、元総社小学校に入学し、堤ヶ岡小学校に転じ、やがて国府村妙見寺内の花園高等小学校へと、此の川に接し、此の山を眺めて人となりました」と詳細に過ぎるとも言える地元群馬と暮

鳥の関係性を提示する。そして「郷土の大詩人の此の作品集を手にして、情操豊かな人間に帰ることが、新教育に添ふ所以であり、文化日本建設の責任を負ふ諸君の行くべき道である」と述べる。ここでは、教科書で習った詩を想起させた上で、その作者を「郷土」の詩人であると再認識させ、「郷土」の詩から涵養される人間教育が新たな「日本」を作るという論理が構築されていることが言えるだろう。「郷里」「郷土」を媒介とすることで、〈山村暮鳥〉は新しい「日本」建設に寄与する詩人としていとも簡単に再利用される。鈴木貞造が「若い世代の青少年の方々には、香り豊かな郷土文化を更に大らかに逞しく、おい育てる為に、こうした芽生えを受け継ぎ、そしてよりあげ、本当に私たち一人々々^マが背負っている文化国家建設への輝かしい先駆者としての誇りに生き、その光榮ある務めを果さんことを切に祈念してやまない」と述べる「序」での論理も、全く同じである。

一方、暮鳥の没した地である茨城県では暮鳥没後の詩碑建立事業に始まり、昭和八年の暮鳥会の結成など、戦前より暮鳥顕彰活動が行われていた。しかし、昭和二十六年以降その活動は、はるかに大規模なものととして行政を巻き込んで展開されていく。昭和二十六年の第二十七回暮鳥忌は、水戸市社会教育課の後援のもと、約百五十名という異例の大人数で開催される。二十六回忌に至るまで水戸での暮鳥忌の参加人数はせいぜい二十名前後ということをもて、二十七回忌の人数の多さは突出してい

る。⁽³⁹⁾

そして、群馬、茨城におけるそれぞれの顕彰活動は昭和三十年の「暮鳥三十年祭」を機に連携を始め、群馬県での暮鳥詩碑建設運動、延いては茨城県大洗町と群馬県群馬町の「文化友好の町に関する覚え書」の調印（昭和五十三年）へとつながっていく。

このように、「郷土」の詩人としての〈山村暮鳥〉の固有名の回復と顕彰活動が終戦を境に始まり、それが各地での建碑活動や資料の蒐集活動を進め、全集の刊行へつながる原動力となっていく。

犀星は『聖三稜玻璃』の「序」をはじめとして、朔太郎ほど暮鳥のよい読み手でなかったことは、「彼の詩の正統な批判といふものは、私のがらではない」⁽⁴⁰⁾と自ら認める通り明らかであるが、生前暮鳥と交流した経緯や作家としてのネームバリューから「序」を書く立場に立たされたと思われる。その犀星が、戦後の暮鳥顕彰の動きを目の前にして、暮鳥の再認識を迫られたことが十分に考えられるのである。

五 〈日本近代詩史〉における〈山村暮鳥〉の普遍化

しかし、犀星に暮鳥の再認識を迫った要因はそれだけではな

いと思われる。もう一つの大きな流れが、新たに登場した詩人たちによる新たな評価言語による暮鳥評価の勃興であり、これらの詩人たちによる新たな暮鳥選集が多数刊行される状況である。

戦前において暮鳥没後の詩集刊行を進めた中心人物は花岡謙二と百田宗治の二人⁽⁴¹⁾と言つてよいが、昭和二十年代になると様相が変わってくる。編集者の代替わりの先駆けが草野心平であり、草野は十字屋書店版『聖三稜玻璃』⁽⁴²⁾をはじめとして、昭和二十八年の創元文庫版『山村暮鳥詩集』⁽⁴³⁾の編者を務める。昭和二十七年には藤原定編の角川文庫版『山村暮鳥詩集』⁽⁴⁴⁾が出版される。犀星が編者となる昭和二十二年高桐書院刊『山村暮鳥詩集』⁽⁴⁵⁾、昭和二十七年新潮文庫版『山村暮鳥詩集』⁽⁴⁶⁾、花岡謙二編の昭和二十六年酣燈社刊『山村暮鳥詩集』⁽⁴⁷⁾と、昭和二十年代には五種類もの『山村暮鳥詩集』が出版されているのである。さらに、昭和二十八年には『現代日本詩人全集 第四巻 山村暮鳥・萩原朔太郎・日夏耿之介』⁽⁴⁸⁾が刊行され、伊藤信吉がその解説を執筆する。

そしてこの新たな編者の参入は、単なる世代交代以上の意味を持つ。草野心平にせよ、藤原定にせよ、伊藤信吉にせよ、暮鳥の『聖三稜玻璃』に対する新しい評価の言葉を持ち、日本近代詩における山村暮鳥の歴史的位位置を遡及するまなざしによって位置づけるのである。草野は「聖三稜玻璃」を中心にした初期の作品は未来派風という定評を既にもつてゐるが、それら

はむしろシュウル・リアリズム的、或ひは更に抽象詩のジャンルにはいるべき性質のものと、私は思つてゐる⁴⁹」と述べているし、藤原は、「表現派、未来派、或ひはキュービズムにおいて、日本で先駆的であつた詩集」「むしろ今日のシュウル・リアリズムの詩人達の作品よりも新鮮であるかも知れない⁵⁰」と述べる。草野、藤原とも、『聖三稜玻璃』刊行以降の言語を用いて、後の詩的運動の〈宣言無き先駆者〉としての位置づけを暮鳥に与えている。もつとも、それらよりはるか以前に、萩原朔太郎が『聖三稜玻璃』に収められた詩『だんす』を「未来派⁵¹」と位置づけたことは有名な事実であり、その意味では刊行当時から「未来派」などの言葉によつて『聖三稜玻璃』を位置づけることはなされている。しかし、萩原朔太郎の試みは、日本において本格的な「未来派」受容による実作が自覚的になされる以前のものである⁵²。それに対し、草野、藤原の言は、「日本未来派宣言運動第一回宣言」をはじめとして、未来派やシュールレアリスムが影響を与え実作がなされる動きを既に眺めた位置から発せられており、その地点から暮鳥が、それらの思想の自覚無き体现者と見えるという詩史的な観点から発せられていると言える。伊藤信吉は『聖三稜玻璃』の作品は、近代詩の世界にあらわれた異質の文学であり、ただ一つのアヴァンギャルドの文学であつた。この意味で私は、この詩集の史的位置を高く評価する⁵³と述べる。こうした評価言語は、さらに新しい世代の書き手によって洗練され、〈山村暮鳥〉は近代詩において朔太郎の卓越化を行う

ためのいわば〈前史〉としての位置を得ていく。大岡信の『蕩児の家系——日本現代詩の歩み——』は大正詩以前／以後における切斷線としての「口語自由詩によつてはじめて獲得できた前衛性⁵⁴」を可能にする条件としての位置に『聖三稜玻璃』を置く。那珂太郎、大岡信、関川左木夫、北川透から瀬尾育生まで、多くの論者が暮鳥—朔太郎という系列上に朔太郎を位置づけている。関川左木夫の関心が「『嚙語』によつて完成されている暮鳥の新詩体、あるいは『聖三稜玻璃』詩体が、いかなる過程を経て朔太郎に伝達されたか⁵⁵」にあるように、暮鳥は朔太郎の表現の開花へ至る階梯として眺められる。那珂は暮鳥に「コトバを、日常的なその指示対象物からはつきり独立した一つの「もの」として対象化し、抽象的にこれを扱おうとする」革新性を認めるとともに、朔太郎との違いを「想像力による現実解体とその再構成を必然ならしめるほどの内的動機⁵⁶」がなかったことに求めていく。北川透は「言語革命」と名付ける口語自由詩の出現における白萩・暮鳥・犀星・朔太郎を取り巻いた言語変革の磁場の重要な位置に暮鳥をつけながらも「詩句の断片としては鋭い語感をもちながら、イメージとしての結晶に至らない、『聖三稜玻璃』の暮鳥の方法の不幸⁵⁷」を述べる。ここにおいて暮鳥は、〈日本近代詩〉の歴史における重要な切斷線として位置づけられるとともに、いわば〈朔太郎前史〉との役割を与えられることになる。こうした位置づけの背景には詩人達の、現代詩が現代詩たるべき方法的〈起源〉をさぐる欲求があると言つ

てもいいだろう。このようにして、詩人達の構想する〈日本近代詩史〉の中に〈山村暮鳥〉の位置が画定されていく。前節で述べた、〈山村暮鳥〉の固有名の回復と地方でのアイコン化と同時進行で、〈日本近代詩史〉の中に〈山村暮鳥〉は嵌め込まれるのである。

昭和二十七年の時点において室生犀星は、群馬、茨城における暮鳥顕彰の動き、新しい世代の詩人達による暮鳥評価の萌芽、この二つの動きを共に目にしていたと思われる。それが室生犀星の「お座なり」に対する言い訳や、「風景 純銀もざいく」の再評価につながっていると考えられる。そうした意味で、犀星の変化は戦後の〈山村暮鳥〉評価の変容に対する指標としてみることができるものだ。

以上、見てきたように、戦後の山村暮鳥評価は「郷里」の誇りを回復するために詩人の固有名を取り返す試みと、〈日本近代詩〉の歴史の中に〈口語自由詩〉以後の意義を定義づけ、戦後の詩人達の方法的起源を探る試みの両面において推進されたと言える。

地方における山村暮鳥顕彰は、「郷土」の生んだ「日本」を代表する詩人として暮鳥を救い出す。教科書によつて人々の無意識に浸透した詩が、実は「郷土」の詩人であつたという語りは、「郷土」に「日本」の代表者を見ることにより「郷土」の誇りを回復するという仕組みを持つ。その意味で、この試みは〈山

村暮鳥〉に固有名を回復する試みであると同時に、「日本」に貢献する価値ある「郷土」として地方の地位を高める試みであり、「日本」を源泉とした「郷土」愛の醸成、「郷土」を通じた「日本」の回復である。「郷土」の誇りから「文化国家」建設の担い手はぐくむという発想は、それが〈群馬〉〈茨城〉という具体的な地名と結びつけられる点を除けば、戦前の「国民性・民族性」の自覚に寄与する「文学の国民教育に於ける価値」と同一と言つていい。

他方、地方での顕彰に随伴した資料蒐集の充実を受けつつ、近代詩とは何かという問い、延いては現代詩はいかなる系譜を経て生み出されたのかという問いの中で、山村暮鳥は近代詩史の中に位置づけられていく。近代詩における言語の問題を考えたとき、萩原朔太郎には特別な関心が寄せられていくことになるわけだが、朔太郎の表現がどのように実現されたのかを考えると朔太郎の〈達成〉に回収される言語的な器を用意したものである。暮鳥の『聖三稜玻璃』の位置が決定される。結果として暮鳥の位置は〈日本近代詩史〉の中に画定されていく。

〈地方〉における固有名の回復と〈詩史〉における普遍性の獲得、そのようにして〈山村暮鳥〉は、「日本」を代表する「郷土」詩人となり、「近代日本詩の最もかがやかしい古典」⁸⁹⁾となるのである。

注

- (1) 山村暮鳥「日本」を収録しているものは、百田宗治が選者となった『萬物節』（厚生閣 昭和十五年十二月）、『山村暮鳥全詩集』（彌生書房 昭和三十九年二月）、『山村暮鳥全集 第一卷』（彌生書房 昭和三十六年十二月）、『日本の詩歌 第十三卷 山村暮鳥・福士幸次郎・千家元麿・百田宗治・佐藤惣之助』（中央公論社 昭和四十四年七月）、『山村暮鳥全集 第一卷』（筑摩書房 平成元年六月）である。

- (2) 前掲、『日本の詩歌 第十三卷 山村暮鳥・福士幸次郎・千家元麿・百田宗治・佐藤惣之助』

- (3) ただし山室は「軍国主義」的な雰囲気がこの詩にあるというそれだけの理由で教科書から排除されるという事態に対して「詩もわからず、愛国心の何たるかも解さない無定見のオポチュニストというしかない」と述べ、「むしろ日本人が誇りを失っている今日こそ、この詩を教科書にでも載せたいものだ」という意見を表明している。

- (4) 「戦争詩」「愛国詩」「国民詩」という名称にかかわる議論については今村冬三『幻影解 「大東和戦争」——戦争に向き合わされた詩人たち——』（葦書房 平成元年八月）を参照。

- (5) 岩波編輯部編『国語 学習指導の研究 巻二（第一巻）』（岩波書店 昭和十年十一月）

- (6) 金子彦二郎監修『昭代女子国文 教授要領 巻四』（光風館書店 昭和十四年五月）。この評価は山村暮鳥の詩「感謝」

「此の世のはじめもこんなであつたか」「人間に与へる」に対するものである。

- (7) 志村弘之『山村暮鳥とその作品』（煥乎堂 昭和二十三年九月）

- (8) 山村暮鳥『萬物節』（厚生閣 昭和十五年十二月）

- (9) 山村暮鳥『風は草木にささやいた』（白日社 大正七年十一月）

- (10) この状況は戦後もさほど変わらない。教科書に『聖三稜玻璃』の詩が初めて採録されるのは昭和六十三年になってからである。（阿武泉監修『教科書掲載作品13000』（日外アソシエーツ 平成二十年四月）による）

- (11) 岩波書店『国語』について『国語教育史資料 第二巻 教科書史』は「編纂者の意図を、自らの作品を柱として、これほど明確にしたものは稀である」（井上敏夫編『国語教育史資料 第二巻 教科書史』東京法令出版株式会社 昭和五十六年四月）と評価し、「当時全国の大半の学校において採択された」としている。諸井耕二は、岩波『国語』の成立について、昭和六年一月の「中学校令施行規則」の改正を受けつつも「国家主義的思想の流れ」の中で敢えて教科書事業に乗り出し、「時流には積極的に参加しようとする意欲はうかがわれるものの、国家主義的なものをむき出しにはしない節度と文化水準の高さを保とうとする姿勢に、この教科書編纂に携わった人々の意識があった」と評価している。（諸岡

耕二「旧制中学校教科書 岩波編集部編『国語』全十巻をめぐって」(『宇部工業高等専門学校研究報告』第三十六号 平成二年三月)

(12) 富山房編輯部編『国語科教授の実際 帝国実業読本提要 卷二』(富山房 昭和十四年五月)ではこの部分について「未だ嘗て恥辱を受けたことなき栄光ある国であることを叙してゐる」と記している。

(13) 前掲、『国語科教授の実際 帝国実業読本提要 卷二』

(14) 坪井秀人は「地理の書」について「自然史(科学的装い)に裏づけを借りて、(国体)としての列島国土の地勢学的エネルギーの成り立ちを読者に学ばせる『第一課』として採用されていることが見てとれる」と述べている。坪井秀人『声の祝祭』(名古屋大学出版会 平成九年八月) 一九三頁

(15) 津川公治は、土田ふじ(暮鳥夫人)所持の雑誌の切り抜きを証拠として、この改作が暮鳥自身によるものではないと述べている。(『暮鳥研究 第一輯』(暮鳥会 昭和十年十月)

(16) 前掲、『風は草木にささやいた』、初出は『詩歌』大正六年九月

(17) 前掲、『風は草木にささやいた』、初出は『詩歌』大正六年三月

(18) 前掲、『風は草木にささやいた』、初出は『詩歌』大正六年四月

(19) 前掲、『萬物節』、初出は『雄弁』大正十一年五月

(20) 前掲、『風は草木にささやいた』、初出は『感情』大正六年三月

(21) 前掲、『風は草木にささやいた』、初出は『詩歌』大正六年九月

(22) 小林美奈「山村暮鳥と『第三帝国』」(『昭和女子大学大学院日本文学紀要』第十二集 平成十三年)

(23) 前掲、『国語 学習指導の研究 卷二(第一巻)』

(24) 平林治徳『新国文大綱 備考 卷四』(立川書店 昭和三年十二月)

(25) 前掲、『国語 学習指導の研究 卷二(第一巻)』

(26) 前掲、『昭代女子国文教授要領』

(27) 引用は『昭代女子国文教授要領』による。

(28) 引用は『国語 学習指導の研究 卷二(第一巻)』による。

(29) 前掲、『国語科教授の実際 帝国実業読本提要 卷二』

(30) 瀬尾育生『戦争詩論 1910-1945』(平凡社 平成十八年) 一一八頁

(31) 今村冬三『幻影解「大東亜戦争」——戦争に向き合わされた詩人達——』(葦書房 平成元年八月) 八九頁

(32) 室生犀星「解説」(『山村暮鳥詩集』(新潮社 昭和二十七年八月)

(33) 『現代詩人全集月報 第一号』(新潮社 昭和四年七月)。この言葉は『現代詩人全集 第六巻 石川啄木集・三富朽葉集・山村暮鳥集』に向けられた言葉である。昭和四年におい

てこの言葉が、『暮鳥詩集』（厚生閣 昭和三年三月）への挑戦としての意味を持ったことについては、拙論「大洗の山村暮鳥詩碑建立」（『雲』第十七号、平成二十四年九月）で論じた。しかし、実際の編集にあたっては、円隆盛期における過密スケジュールのため、犀星が山村暮鳥の詩を精選する時間にはなかつたことが暮鳥会寄託資料の土田ふじ宛室生犀星書簡より判明した。この点については拙論「室生犀星書簡より見る『現代詩人全集』『山村暮鳥集』『明治大正文学全集』『山村暮鳥篇』をめぐって」（『雲』第十八号 印刷中）を参照されたい。

(34) 前掲、志村『山村暮鳥とその作品』

(35) 小山茂市『暮鳥伝』（マツダ印刷 昭和三十九年九月）

(36) 前掲、志村『山村暮鳥とその作品』

(37) 前掲、『風は草木にささやいた』、初出は『詩歌』大正七年一月

(38) 大洗町に建碑された山村暮鳥最初の詩碑建立の経緯については、拙論「大洗の山村暮鳥詩碑建立」（『雲』第十七号、平成二十四年九月）を参照されたい。

(39) 『山村暮鳥生誕百年記念写真集「雲と愛の詩人」』（群馬町文化協議会 昭和五十八年十二月）による。

(40) 室生犀星「序」（『山村暮鳥詩集』（高桐書院 昭和二十二年六月））

(41) 花岡謙二編集になるものには『月夜の牡丹』（紅玉堂書店

大正十五年七月）、『暮鳥詩集』（厚生閣 昭和三年）、『土の精神』（素人社書屋 昭和四年）、『暮鳥随想』（春陽堂 昭和十六年七月）、『暮鳥詩集』（酣燈社 昭和二十六年）があり、百田宗治の手になるものは『鑑賞暮鳥詩選』（金星堂 昭和四年二月）、『萬物節』（厚生閣 昭和十五年十二月）がある。

(42) 山村暮鳥『聖三稜玻璃』（十字屋書店 昭和二十二年十月）。この書は『聖三稜玻璃』の復刊ではなく、草野心平が『三人の処女』『午の十二時』『聖三稜玻璃』から選んで編んだ選集である。

(43) 山村暮鳥『山村暮鳥詩集』（創元社 昭和二十八年九月）

(44) 山村暮鳥『山村暮鳥詩集』（角川書店 昭和二十七年十一月）。藤原定が選者となったこの『山村暮鳥詩集』は、後に『黒鳥集』（昭森社 昭和三十五年一月）として刊行されることになる未刊行作品が収録されている。その意味で草稿テクストの発掘の動きと連動し、山村暮鳥全集刊行へつながる流れの萌芽を含んだ選集と言える。

(45) 山村暮鳥『山村暮鳥詩集』（高桐書院 昭和二十二年六月）

(46) 山村暮鳥『山村暮鳥詩集』（新潮社 昭和二十七年八月）

(47) 山村暮鳥『山村暮鳥詩集』（酣燈社 昭和二十六年七月）。なお、巻末の花岡謙二「あとがき」によると、この本は昭和三年の厚生閣刊『暮鳥詩集』の内容をそのままに刊行したものとされているが、順序や収録詩、タイトルなどに多少の異同があり、「嚙語」など厚生閣刊『暮鳥詩集』には収められ

ていない詩を含んでいる。刊行に際して、花岡謙二が再度整理したと思われる。

(48) 『現代日本詩人全集 第四巻 山村暮鳥・萩原朔太郎・日夏耿之介』(創元社 昭和二十八年十二月)

(49) 草野心平「解説」(『山村暮鳥詩集』創元社 昭和二十八年九月)

(50) 藤原定「解説」(『山村暮鳥詩集』角川書店 昭和二十七年十一月)

(51) 萩原朔太郎「日本に於ける未来派の詩とその解説」(『感情』大正五年十一月)

(52) 当時の「未来派」受容については千葉宣一「日本における未来派の紹介と影響(上)——日本近代詩史の再検討」(『国語国文研究』昭和四十一年三月)を参照。

(53) 伊藤信吉「解説」(『現代日本詩人全集 第四巻』創元社 昭和二十八年十二月)

(54) 大岡信『蕩児の家系——日本現代詩の歩み——』(思潮社 昭和四十四年四月)

(55) 瀬尾育生「パラノイア・ポエティック——暮鳥・朔太郎・口語自由詩——」(『現代詩手帖』平成二年九月)

(56) 関川左木夫『ボオドレエル・暮鳥・朔太郎の詩法系列——「嚙語」による「月に吠える」詩体の解明——』(昭和出版 昭和五十七年二月)

(57) 那珂太郎「山村暮鳥と萩原朔太郎の関係——「月に吠える」

の詩法の成立に関して——」(『無限』昭和三十七年)

(58) 北川透『萩原朔太郎〈言語革命〉論』(筑摩書房 平成七年三月)

(59) 草野心平「覚え書」(山村暮鳥『聖三稜玻璃』(十字屋書店 昭和二十二年十月))

(二〇一三年六月三日受理)